寄稿　箱根駅伝の思い出

【第37回箱根駅伝】

箱根駅伝の思い出

6期　室本弘道

今でも熱く青春時代を思い出す光景がある。昭和36年初めて防大が箱根駅伝に出た時のことだ。残念ながら私は短距離・フィールドの選手だったので、監督とともにロジに回った。1月1日の試合前夜のことを強烈に覚えている。皆の関心事は、襷がつながるかなどという大それたことではなく、箱根の5区を果たして走りきれるかであった。その意味もあって、選手全員が小田原に宿をとった。

当時は中央大の全盛時代だったが、そこは再起をかける早稲田大の常宿だった。初出場の我々の落ち着かない様子を見て、わが国の陸上競技史に残る早稲田の名コーチ・中村清氏が、「皆さんに走る前夜の心構えについてお話しましょう」と言ってくださった。敵に塩を送る光景だが、中村氏には可哀想で見ていられないといった気持からだったと思う。ちなみに陸軍中野学校のご出身だった。小一時間ばかり、「走るのは誰でもつらい。辛くなったら母の顔を思い出せ。精神統一。」など「心で走れ」の著者らしく実に感銘深いお言葉を精神安定剤として聞いた。早稲田の選手でも辛いのかという当たり前のことにひどく感動した我々であった。お話のあと、おそるおそる私が質問した。「走る前に選手に食べさせるものは何が良いのでしょうか。」即座に「バナナです」といわれた。私は途方にくれた。当時の貧乏防衛大学生でバナナを生まれてから食べた人がいただろうか。監督に話した。果たしてバナナなるものがどこで入手できるのか、お金はあるのか、食べつけないものを食べて下痢でもしないだろうかなど不安だらけだった。実際に走る選手の人数分だけの本数のバナナをやっと宝物のように買ってきたことを思い出す。

それから早いもので40年がたった。定年後2番目の職として、苫小牧駒澤大学に奉職した。大学では国際センター長もやったが、そのセンターには坊主の宿泊所もある。そしていまや箱根駅伝の覇者駒澤大学の夏季合宿所でもある。日本のスターともいえる自信に満ちた堂々たる連中を見て、あの頃5つの出場枠をめぐって、この駒澤大や山梨学院大と競ったことを熱く思い出した。

また今年も青春に帰れる箱根のときを迎える。

（現　武蔵野学院大学教授）

【第39回箱根駅伝】

心のリレー

7期　石橋　穣

昭和38年正月、防大は、2回目の箱根駅伝に出場した。私は、5区箱根の山登りでした。

当時は、小田原市街が中継所、距離24.7km、標高差834m、平坦地で約30kmを走破する力が必要だと感じました。試走は、2回行い、1回目は軽く走って予期以上のタイム、2回目は本番の積りで走ったが、途中から腹筋が攣り、完走はしたものの意識朦朧、気がついた時、部屋で同期の鳥居君が体をさすってくれていた。本レースでは、途中棄権だけは避けるため、最初は押さえ気味にし、最後の難所小涌谷を過ぎたら思い切っていこうと決めた。

当日は、快晴、及川君（7区走者、故人）が付き添ってウォーミング・アップ、その間繰り上げスタートも検討されていた。4区の猪瀬君が必死の快走、汗と体温の残った防大のタスキを受け取ることができ、勇躍スタートした。宮ノ下の急勾配を過ぎた付近で、伴奏車（井坂先生、中村前主将搭乗）が前に出た直後、若い男女の乗用車に追突された。私は転倒、しまったと思い、慌てて屈伸運動、走れそうだったので、ほっとした。なんとか走って、箱根神社前にさしかかったら、道路は人ごみで混雑、疲れていることもあって、歩き出した。その時、外套を着た中年の人が、頑張れ♪　といって、100mぐらい伴走してくれた。私は、気を取り直して走り始め、やっと箱根のゴールに入ることができた。最悪のタイムで、申し訳ない気持ちでしたが、完走してタスキを繋げたことに、一片の安堵と誇りを感じました。翌日、10区の主将中川君が読売新聞社前にゴールするのを、ラジオで聞きながら、感激で一杯になった。駅伝は、タスキを受け継いで、走者だけでなく、控えの人、支えてくれた人、応援してくれた人達の思いを、タスキに託して、「心のリレー」をすることに、大きな意義があると思いました。

箱根駅伝は、青春時代の最高の経験、その後の人生における大きな資産を得られたと思っています。

将来いつの日か、また防大が箱根駅伝に出場して、後輩諸君が同じような体験をして頂きたいと念じてます。

【第79回箱根駅伝】

箱　根　駅　伝

48期　岡　本　英　伯

第79回東京箱根間往復大学駅伝競走大会から学連選抜チームが参加することになり、昨年は全日本選抜、今年も関東学連選抜が箱根駅伝本戦に参加している。その最初の学連選抜チームの一員として、私は第79回箱根駅伝において、第６区を走り、たいへんすばらしい経験をすることができた。

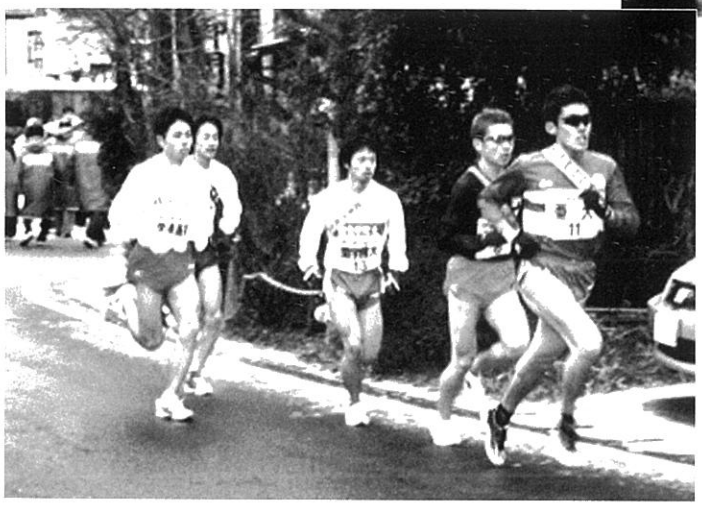
箱根駅伝予選会の結果により関東学連選抜の16名の中に選ばれたが、周囲の期待がプレッシャーになり、それにより調子を落とし、思うように走れない日々が11月下旬まで続いた。そんな時、関東学院大学と合同練習する機会をコーチからいただき、そこでいっしょに質の高い練習をすることができたので、そこから自信と調子を徐々に取り戻すことができた。そしてその後の選抜チームの合同練習会、選考レースを経て、希望していた第６区に選ばれ、箱根路を走ることとなった。

６区は全長20.7キロの下り中心のコースであり、箱根駅伝出場が決定してから本番までは約２週間しかなく、全コースを走ることは疲労と故障の面から困難であった。そのため最初の５キロの登りと９キロ地点までの下り、そして残り３キロ地点からゴールまでの試走を２回実施した。また年末年始はコーチの家に泊り込みで練習させていただき、いい調子で本番を迎えることができた。

本番当日は早朝から雪が降っており、箱根駅伝としては16年ぶりの雪であった。８時10分、私を含めた５名が同時にスタートしたが、雪はますます強くなり路面状況は悪くなっていた。中盤まで亜細亜大学の選手と走っていたが、残り10キロ地点からペースアップし、残り３キロ地点で先行していた専修大学、関東学院大学の選手をとらえ、そのまま小田原中継所で無事に次の走者に襷を渡すことができた。結果は62分８秒の区間15位であったが、箱根駅伝で箱根の山を走ることができ、また多くの方々に声援をいただき、たいへん感動した。

私がこのように箱根駅伝を走ることができたのは、周りの方々の支援、応援があったからだと考える。防大陸上部OBをはじめ、顧問の方々、陸上部の部員、そして高校の恩師などさまざまな人々の支えによって走ることができた。苦しんだときもあったが、かけがえのない経験をさせていただいたことに感謝している。またこれにより防大生でも他大学と戦えることを示せたと思うので、これからは後輩にがんばってほしい。今後は海上自衛官として海上防衛に携わるが、箱根駅伝出場で得た経験を今後に生かしていきたい。





寄稿　各パートの思い出

【短距離パート】

思い出の地

39期　永田和成

防大を卒業して、すでに10年が経過した。学生時代の思い出は、何だったかと考えてみると、学生隊舎での生活そして校友会活動である。私が、陸上競技を始めたきっかけは、中学時代、剣道の試合で他の学校に行き、スパイクを履き走っている学生をみかけたとき。

運動会で１番をよくとっていた私にとって、あれを履いて走ったら、どこまで記録がのばせるだろうという思いからだった。そして、高校ではもちろん陸上競技部に入部し、防大着校日には、ジャージ、ユニフォームそしてスパイクも携行し、入校前から、陸上競技部に入ることを決めていた。いざ、防大での生活が始まると、１年生のうちは、日々の生活に追われ、校友会活動に集中するだけの余裕はなく、先輩に励まされながら、練習に参加している日々だったが、そんな中でも、なんとかリレーメンバーに入ることができ、当時の先輩方には、非常に感謝しています。そして上級学年になるにつれ、心の余裕もでき、練習に、より専念できるようになり、記録も伸びてくると、俄然やる気がでるとともに、４年時には短距離パート責任者として、いかにみんなをまとめていくかを考えていたように思う。４年間という長いようで短い期間ではあったが、先輩を追い越すんだ、後輩に追い越されたくないんだ、ただその一心でトラックを走っていたように思う。

最近、仕事の関係で、防大53期生の着校日、沖縄から入校する学生を引率していった。正門を通過する時点から、当時の光景とは、さまがわりしていることに驚いたが、陸上競技場は当時のままであり、学生隊舎の前の通路からトラックを眺めると、当時練習していた光景がつぎつぎと浮かびあがり、懐かしい思いで、しばらく立ち止まっていた。

現在、陸上競技部で頑張っている皆さん、トラックそしてフィールドは、将来、思い出の地となることは間違いありません。きつい練習や、苦しいこともあるかもしれませんが、日々の練習、頑張って下さい。

【中距離パート】

800mにかけた４年間

41期　和泉憲昌

防大での４年間は、800mにかけた４年間でした。そしてその成果が日本学生選手権での優勝でした。大学では陸上競技を真剣にすることはできないだろうと思っていましたが、伊藤監督との出会いにより方向が変わり、真剣にやってみようと思うようになりました。

練習は、腹筋背筋を中心とした「虎の穴メニュー」、マック式トレーニング、ウインドスプリント、タイムトライアルが主でした。また、自分の歩数を数え、そこから自分に最も適した歩幅を考えることなどもしました。

最後の１年は、同期の柵木を中距離練習に引き込んだことが良い結果を招きました。毎日、練習の最後に300mのタイムトライアルを入れ、ほぼ毎回柵木に負けました。日本学生選手権での残りの300mはこのタイムトライアルのイメージで走り、結果は１位でしたが、イメージでは柵木に負けてのゴールでした。考えもしなかった学生チャンピオンになることができましたが、今でも自分の中



月刊陸上競技に掲載された優勝したときの写真

では勝者は柵木だと思っています。

800mに真剣に取り組むことで、人生が変わり、進路も変わりました。大学卒業後も競技を続け、幹候校から自衛隊体育学校へ進み、2年半プロのアスリートとして800mに取り組めました。オリンピックへの出場はなりませんでしたが、日本選手権では6位、日本ランキングは最高5位に入り、ヨーロッパ遠征にも2度参加することができました。記録は1’50”66（学生時）から1’49”53と1秒程度しか向上しなかったのですが、大学での4年間がなければここまで進めなかったと思っています。ご支援を頂いたたくさんの方々に深く感謝いたします。

【跳躍パート】

陸上競技を通じて

46期　勝手武文

私は、中学3年から陸上競技を始め、約8年間の陸上生活を送りました。陸上競技を通じて感じたことは、精神的な強さが増したこと、自分の能力を何となく知ることができたことなどがあります。私の専門種目は走り幅跳びであり、8年間、走り幅跳び一筋で練習してきました。試合での記録は、関東インカレ5位の時の7m07cmが最高でしたが、練習嫌いだった私は、練習においていかに楽をするかということだけを考えてる時期もありました。競技者の少ない跳躍種目の練習は、一人での練習になることも多く、楽をしようと思えばいくらでも楽をすることができます。しかし、幸か不幸か、良きライバルに恵まれ、ライバルに負けたくないという気持ちがあったおかげで、人並みの練習ができ、ある程度の記録を残すことができたと思います。

球技などのスポーツと違い、陸上競技は自分の能力が秒単位あるいはセンチ単位でそのまま結果となって現れるので、ライバルとの勝敗だけでなく、その差までもが明白に現れます。そういう意味では非常に厳しい面があると思います。

試合に向けて練習している後輩諸君に対しては、一人でもよいので身近なライバルを作ることを提案します。

ライバルは多ければ多いほど自分にとっては厳しい状況になると思いますが、必然的に妥協ができないことによって、自分自身の能力向上という意味では非常に効果的だと思います。これは、私独自の考え方に過ぎませんので、自分なりに自分に厳しくするための方法を考えてみるとよいと思います。

最後になりましたが、陸上部OBとして、後輩諸君の活躍を楽しみにしています。体に気をつけてがんばって下さい。

【投擲パート】

投てきの思い出

31期　黒田弘人

確か旧ソ連のやり投げ選手のルーシスの言葉だったと思いますが、投てきをやる魅力は、その「飛翔の魅力」にあるといいます。私もそれが一番の魅力でして、当時、関東インカレで国立競技場の遠く青い芝をめがけ投げた槍が、澄み切った青空の中をまるで時間が止まったかのように見えたあの感覚は忘れられません。陸上競技、その中でも投てきをやっていてよかったと今でも思えるシーンの一つです。さて思い出しますと投てきの練習は、瞬発力を養う短距離走、パワーを付けるウエイトトレーニング、持久力を養成する冬季のトレーニング等、幅広く基本的な体力作りができ、年をとってその貯金の有り難さを何度か感じることがありました。でも最大の思い出はなんと言っても試合後の食事です。ご案内の通り、投てきグループは皆大食漢で、店の人がビックリするくらいよく食べました。少人数の所帯ということもあり、先輩・後輩関係なく本当に楽しく過ごせたそんな時代だったと思います。取り留めのない話を申し述べましたが、当時のことをこのように楽しく思い出せるのは、お世話になった指導者の方々、先輩、同期、後輩のおかげだと思いますし、伝統をつくって頂いた歴代の諸先輩のおかげだと、改めて感じております。

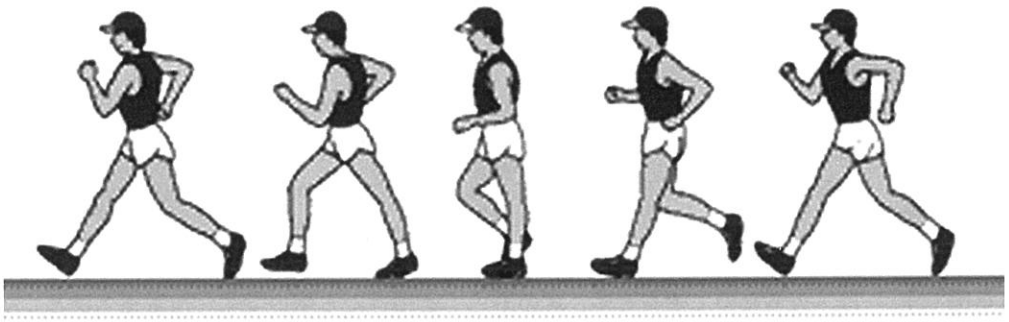
【競歩パート】

故土屋先輩へのお詫びと幻の記録

20期　宮島俊信

私の防大現役当時から出版が開始された「走跳投歩」が毎年送られてくる度に脳裏をかすめることが、二つあります。一つは、「走跳投歩」の歩の現役がいなくなった寂しさと故土屋先輩へのお詫びです。防大の競歩は12期の故土屋先輩をもって嚆矢（こうし）とし、その後、毎年の関東インカレでは防大の数少ない得点種目となりました。土屋先輩が亡くなられたのは、私が防大４年生の時でした。後日御霊前にお参りした折、先輩が愛用されていた靴やランニングウェアーを戴き、感激して練習したことを思い出します。今や防大で競歩のパートがないのは、私の卒業後後輩に対する面倒見が悪かったためではと寂しさを感じるとともに、故土屋先輩に対し伝統を途絶えさせて大変申し訳ない気持ちになります。

二つ目は、関東インカレ10km競歩における私のタイムが幻の記録に終わったことです。国立競技場で一部・二部同時のスタートでした。防大では長く歩く練習時間が取れないため、授業の休み時間は足のすねの筋肉を鍛えるため爪先を上げ踵で足踏みをしたり、課業行進時にフォームチェックをしたり（お陰で指導教官からは歩き方がおかしいと注意されました。）、また当時高価な８ミリビデオを自分で購入し試合の度に強い選手のフォームを撮り、研究し、毎日の練習ではその強い選手が自分の前を歩いているイメージを描きながらトレーニングしてきました。このようにして臨んだ試合でしたし、駆け引きのタイミングも色々考え作戦を立て、当日はイメージ通り試合運びができ、全体では日大の中村選手に次ぐ２位となりましたが、二部で優勝し実力は出し切れたと満足しゴールしました。しかし、興奮のあまり鼻血がでて暫く防大の応援席に戻れませんでした。そうこうしている内に、発表タイムがおかしいのではと気づきました。なぜなら、１位の中村選手と私のタイムがともに１分遅くなっていたからです。全体で３位の選手が私より200m以上離れてゴールしたのに、タイムは５秒遅れにすぎなかったのです。中村選手は、当時の学生記録の更新で最優秀選手賞がかかっていたため、日大の計測員が止めていたストップウォッチを見せながら、３位の選手と私の３人で一時間以上抗議しましたが、認められませんでした。そして、私の正式タイムは、現在の防大記録48分28秒２となりました。「走跳投歩」を見る度に、二部優勝を果たして国立競技場のポールに防大の逍遥歌が流れる中、防大旗を仰ぎ見た喜びとともに、幻の記録47分28秒２が正式タイムとして認められなかったことへの悔しさが蘇ります。



寄稿　女子部員の思い出

【女子１期】

防大陸上部創部50年に寄せて

40期　平井久恵

私が陸上部に入部したのは、もう10年以上も前のことになります。入部の理由はよくありがちですが、私の都道府県対抗駅伝県選抜の運動歴に惑わされた対番学生に勧誘されたからです。

しかし入部後は、高校の頃陸上部の練習に明け暮れた反動か、窮屈な学生舎生活の反動か、対番の期待を裏切り、いつもストレッチやジョギングをして、のんびり健康維持に努める毎日を過ごしておりました。

また、高校時代の走りにはもう戻れないと悟った後は、100mからフルマラソンまで様々な種目に出場、「出場すれば全て防大記録だ」と先輩に煽てられ、無謀な挑戦をしておりました。未だに防大10傑に残る恥ずかしい記録は、こうして生まれたものでした。

数年前、指導教官として防大に勤務する事がありましたが、陸上部は積極的に新しい練習方法を取り入れ記録に挑戦し、大変頼もしく思えました。これからも益々陸上部が発展することを祈っております。

【女子７期】

陸上部創立50周年に寄せて～学生時代を振り返って～

46期　中島樹理

防衛大学校陸上部創立50周年ということで、まずは一言心よりお祝い申し上げます。

このような記念号に私のような若輩が記事を書かせて頂けるということで、恐縮かつ大変光栄に存じます。

早いもので私が防衛大を卒業してから３年が経とうとしています。私は特に走り幅跳びを専門種目としていました。グランドが学生舎の真ん前だった１大隊であったのを良いことに、日が暮れてからも幅跳び場で跳躍し続けたことは今でもはっきりと覚えています。私は高校時代の自己ベストである５m71cmという記録を破ることに躍起になっていました。今思えば、かなりがむしゃらに、時に我が儘が過ぎるほどに練習していたと思います。多くの方に迷惑をかけることもあったと思います。

自分にとって走り幅跳びと防衛大学での４年間は切っても切れない関係でした。防衛大での４年間は、走り幅跳びのためにあったと言っても過言ではないのです。朝起きて日朝点呼が終わったら、そのままジャージに着替えてグランドを走る、夕飯の食堂が閉まるぎりぎりまでグランドで居残り練習をする、冬季休暇に入ったら実家（私の実家は秋田です。）は、大雪なので帰省せず、雪のない神奈川に残ることに決めて、グランドを好きに使って個人合宿を強行する、陸連を秋田県登録にし夏合宿前に秋田県の大会に出る…報われると信じてとにかく思いつく限りのことをしました。

結果は、防衛大４学年最後の理工系大会で５m24cm、その年の秋田県の県民大会で５m34cmと自己ベストには及ばない記録でしたが、それが私の防衛大４年間の最高記録となりました。こういうと寂しい感じがしますが、記録に満足いったかというと満足していないというのが本音です。もっと良い練習方法ややり方があったかも知れません。ただ、自分が挑戦し続けたことに、後悔はありません。

こんな私でしたからクラブの大切な仲間達とぶつかることもありました。今もあんな我が儘なやつ、と良いイメージを持っていない人もいるかも（!?）しれません。

多くの仲間達、後輩、そして部長、監督を始めとして指導に当たってくださった諸先輩方、今、それぞれの人生を歩まれている真っ最中と思いますが、多くの方のご多幸とこれからの後輩達の一層の活躍をお祈りします。これを読まれて懐かしく思われた方がありましたら、三沢管制隊で管制官の一歩を歩もうとしている私に連絡でも頂けたら幸いです。後輩達へひとこと、とにかく後悔のない４年間を、そして仲間を大切に。

ありがとうございました。

【女子10期】

たのしみは 幅跳び跳んで 着地して 白旗上がり 記録聞くとき

49期　竹　内　由紀枝

これは私が中学の時に、橘曙の和歌になぞらえて作ったものです。陸上競技をやっていて、私は記録を聞く時が一番楽しみです。陸上競技ほど自分が努力したぶんだけ結果に表れるものはないと思います。私は中学のときに陸上をしていて、大学でもう一度やってみようと思い校友会に入りました。そのときの上級生の方々はそれぞれに志が高く、1秒でも早く、1cmでも遠くへと努力されていました。防大生活をしている中で、自分の体調を整え、コンディションを作り上げるというのは容易ではありませんでしたが、悔いのない記録を残したいと思いがんばってきました。4年もあると1年のころには思いましたが、実際はあっという間です。下級生には悔いの残らないようにがんばってほしいです。辛い中にも、自分なりの楽しさをたくさん見つけていってほしいと思います。



寄稿　現役からの便り

記録を目指して

50期主将　森口勇輝

現在陸上競技部は約30名の学生が短距離・中距離・長距離・投擲パートに分かれて、それぞれ専門的な練習を重ねています。例年我々は９月に行なわれる関東理工系学生大会優勝、10月に行なわれる箱根駅伝予選大会での入賞を目指しています。そのほか関東インカレの出場など、レベルの高い大会にも挑戦しています。

上記の２大会を終え政権を交代した今、部は一丸となって冬季練習に励んでいます。試合数が少ないこの期間を最大限に活用して、大幅なレベルアップを目指すため、短距離では基礎練習や基礎体力の向上に励み、中距離や長距離ではこの時期を活かした走りこみに力を注いでいます。

冬季は試合が少ないのですが、長距離パートに関しては昨年行なわれた「よこすかシーサイドマラソン」では学校対抗の部３位、「横須賀市民駅伝大会」においては優勝という結果を残しています。また、横須賀市代表選手にも選ばれている学生もおり、彼らは市町村対抗の駅伝大会への出場依頼を受けています。

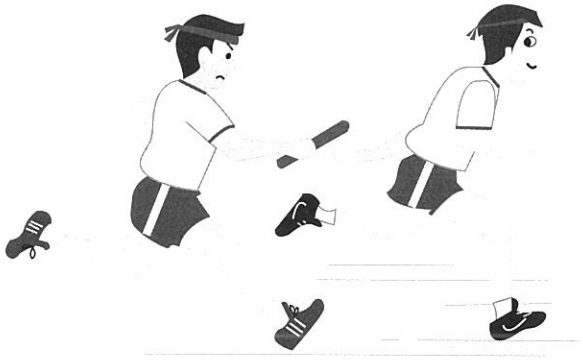
冬に試合が無いパートでも春からは多くの試合が予定されています。休日も質の高い練習を行なっており、良い結果を出せるよう努力しています。

陸上部飛躍の年

50期副主将　上田幸史

我々防大陸上競技部は春に行われる関東インカレ、秋に行われる関東理工系選手権大会を目標に毎日の練習に励んでいる。具体的な目標としては部員全員の自己新記録更新、チームとしての団結力強化である。しかし現状として今各人が持つ記録では誰一人として先に述べた大会で上位に食い込むことは難しい。それを踏まえてシーズン終了とともに陸上競技部は意識改革を行った。従来の練習方法では各人の能力に頼るところが多く練習量にも個人差が見られた。それを改善すべく今主流である理論を学習しその技術練習について教育、理解させることで全員のレベルアップと意識向上に努めた。『陸上競技部としての成長』、今年度はそれを部員全員が目指しまた理解してオフシーズンに入った。

50期政権となってから４ヶ月が経とうとしている。今はオフシーズンの真只中。オフシーズンが始まったころの思いはさらに強くなり全員が高い目標と１歩先の自分を目指して厳しい練習に励んでいる。



故人を偲ぶ

故・鈴木公男君を偲ぶ

11期　山根嘉大

鈴木公男君は、私の１期後輩であった。

彼は短距離パート（跳躍）であり、私は長距離パートであった。

故障がちの私は、３学年になると部マネジャー見習となり、種目も短距離（200、400m）となって練習の場が近くなったせいか、鈴木君をよく知ることとなった。彼は、穏かな性格で無口ではなかったが、比較的口数は少なく、黙々と練習をするタイプで、まさに紳士であった。鈴木君は、跳躍種目であったこともあり、しばしば膝の故障に悩まされていた。

私も、１・２学年の時には膝、ふくらはぎ、足首等を故障がちで練習見学とグランド整備の苦い思い出があったので、彼に私の経験を語り故障克服法をアドバイスするようになった。

10期マネジャーの後藤先輩は、長距離パートで箱根駅伝予選の重要な選手要員であったので、夏から練習に専念されることになり、３学年の私がマネジャーを実質的に努めた。その頃私は、短距離ランナーとしては200m、400m、400mリレー、1600mリレーの要員であったので、２学年の12期からマネジャー付きを選ぶことになり、私は鈴木君を推薦した。

彼は、私と違って穏かな性格であり、行動も沈着冷静で同期生はもとより先輩や後輩にも人望が高かった。彼は、いつも笑顔で私を助けてくれた。

年に何回か開催される関東陸上競技連盟のマネジャー会議には、平日外出の許可をとって２人で出席した。京浜急行等での移動の途中には、主に陸上部のことであったと思うが、色々と意見交換したことが今も懐かしく想い出される。

私は陸上要員、鈴木君は海上要員であったため、防大卒業後は彼と一度も会うことがなかっただけに、目鼻立ちが整った、スマートな好青年の鈴木公男学生の姿が今もそのまま瞼に浮かぶ。

遺稿　“どら猫３尉”

2期　田熊嗣利

『どら猫３尉』の転載に当たって

50年誌の作製に当たり、陸上部OB会の25年誌『走跳投歩』を２度３度と読み直してみたが、何れの記事からも防大陸上競技部に対する愛情と心意気が伝わってくるものがあり、心を打たれるものが多かった。

就中、OB会の創設に大きく貢献された故・田熊OB（２期・陸）が書かれた『どら猫３尉』は、防大生のパイオニアとして部隊において隊員とともに汗と涙を分かち合いながら奮闘する若手幹部の姿が、若者らしい素直なタッチで描かれていて、初級幹部の時代にタイムスリップしたような気分で詠ませて頂いた。

時代は変わっても、小原台で過ごした青春の一時期の情熱を陸上競技部にかけた同志として、若いOB会員の皆さんにも是非読んで頂きたいと思い、50年史編纂責任者としての勝手な判断で転載させて頂きました。（後藤記）

序に代えて

悪夢のような昨年の６月14日からもう１年半の歳月が流れた。

昨今幾分気持の落ち着きを取り戻してみると、嗣利がこの世に残していったものに対して無性な愛着を感ずる今日此の頃である。

こんな気持から彼の母が茅屋の片隅を整理中、箱詰め書類の中からふと見つけ出したのがこの小品である。

これはおそらく昭和31年頃、防大３年生の時札幌郊外真駒内の第18普通科連隊へ隊付中実際見聞したものを小説風に纏めてみた物であろう。学生のような理論一点張りでは割り切れない実部隊の動き、善意にでた過ちをどうして傷つけないで導いていくかという上司の人知れぬ苦心、これも元は無限の愛情から湧き出るものと感得する等学問では得られぬ多大の収穫が拙い筆先に滲み出ていて懐かしい限りである。

親馬鹿の譬もさることながら自宅にだけ蔵しておくに偲びず、ここに数部を複製して彼が生前文字通り親身のお世話にあずかった方々にお届けしたいと思う。

願わくば、今後とも永く生前に変らぬご厚情を賜らん事を。

昭和44年12月14日
父　田熊利三郎　謹白

冬の風吹き付ける季節風のために、雪の表面が美しい波型になった緩やかな起伏のある平野が続いて、遥か彼方の地平線で空と一緒に交わっているかのように見えた。たった今通っていったらしい馬橇の跡が、降ったばかりの浅い雪の上を、レールのようにピカピカ光って、向こうの街の方に消えていた。

北国の冬は早く暮れる。3時半というのに、もうあたりは薄暗く西の空だけがほの赤くなって、遠くの連山がうっすらと浮き出ていた。

S3尉は暫らく立ち止って自分の歩いてきた方を振り返ってみた。雪の上についている足跡は馬橇の跡に添ってついていた。自分では無意識に歩いてきたつもりでも、人間は何か目印になるものを目あてにして歩くんだなあと彼はふとそんなことを考えた。すぐ後のリンゴの木に積もっていた雪が、風もないのにバサリと音を立てて落ちた。

2、3回深呼吸した彼は、防寒帽を脱いで手に持つと、足早に歩き出した。半長靴の下で新雪がキュッキュッと鳴り、むき出しの頬に冷たい風が気持よかった。

S3尉はこの街に駐屯する1個大隊が仮の分屯地の小隊長である。ここにきた時にはまだ6月の初めで、野も山も生き生きとした緑に覆われていた。それから半年、もうあたりは一面の銀世界となり、北斗の星が大空の道しるべのように高く空にかかる毎日となった。しかし、S3尉にとって珍しくも驚きでもなかった。彼は、現在、神秘のヴェールに包まれている樺太の国境の小さな町で生まれ、そこで育った雪の子であった。

内地に引き上げて10年、泥んこになって遊んだ幼友達のイタズラッ子達もみんなバラバラなってしまい、消息を知る由もなく、故郷の山も川も、2度と訪れることのできない遠い彼方に追いやられてしまった。それでもS3尉の身体の中には、小さいときのエネルギーがあり余っていて、いつも彼を落着かせなかった。

大学にいた頃のある日、彼は偶然にニュース映画で初めて自衛隊の演習を見た。若い指揮官が4～50人を引きつれ、雪煙をあげて突撃していった。みんなスキーは上手であった。そのとき、彼の体の中で眠っていたアバレン坊の心がむくむくと頭をもたげてきたのであった。

秋だというのになんて暑い所だと思いながら、彼は九州久留米の営庭に並んでいた。溜亮たるラッパと共に国旗がスルスルと上がっていった。

何百人かの制服も真新しい青年達は一斉に上がりゆく国旗に対しギコチナイ最初の敬礼をしたのであった。

こうして彼の幹部候補生としての生活が始まったのである。

S3尉は大学にいたときから、誰がなんといおうとも、自衛隊は軍隊であると確信している。そして軍隊である以上、強くなければ意味がないと考えている。

彼は子供の時、叔父から代々伝わる宝刀を見せられたことがあった。叔父は刀が好きで剣道の達人であった。あるとき叔父は、小さいS3尉に、絶対に人を斬ってはいけないが、いつでも必ず切れるように修業していなければならない。それが本当のわが身を守る威力だという意味のことをいった。彼はこの言葉を、神秘的な光を放っていた日本刀と共に今でも覚えている。そして結局は軍隊も刀と同じものではないだろうか、と考えるようになった。これは彼一流の単純な考え方かもしれない。が、刀も軍も共に凶器だ。身を守る刀、国を護る軍隊、根本において何の違いがあろうか。S3尉はこう考えた。

しかし、いつまでも同じ力で、同じ技であったら同であろうか。相手は長い刀を使うかも知れない。あるいは2刀流でくるかも知れない。どんな新戦法にも対処できるためには相手を知り、四囲の情勢をわきまえ、常に自分の剣が人に勝るよう改良することを怠ってはならない。しかし、そこに貫く精神はただ一つ、決して抜かない威力である。

けれども、そういう状態にいたるまでには長い厳しい修練が必要であろう。だが途中で挫折しないことだ。何といわれようとも、どんな困難があろうとも、必ず努力し続けるべきだ。目標は遠い、あるいは一生かかっても到達できないかもわからない。それでも前進しなければならない。最も恐ろしいのは、現状に妥協し、そこに腰を下ろしてしまうことなのだ。

自衛隊は、現在実に小さな存在である。小さいということは数が少ないことではない。実力が小さいことである。S3尉もそう思う。こんな軍隊でいったいどうなるかと。

しかし、彼は現在そう考えても、将来の国軍を今のままであるとは考えていない。

S3尉は現在の自衛隊を、一つの発展段階の途上にあるものと思っている。日本は十年余の空白期間がある。何で急に創設された軍隊が、すぐに世界一流のものになり得ようか。世界各国の軍隊も、少しずつ発展し改良されてきたものである。わが国だけが一足飛びに進歩するわけがないではないか。その努力を続けているのが俺達なのだ。とS3尉は割切っているつもりでも、多くの人と接するにつけ、自分の考えは間違っているかどうなのか、悩むことも少なくないのである。

旧軍をたまらないほど懐かしがっている大隊長、俺達は新しいんだ、昔の軍人のいうことは古いと片付けてしまう同僚のB3尉、昔の軍人のいうことは参考になることが多いという全然反対のH3尉、やっぱり軍隊は厳しく鍛えねばならないといつも言い張る元上等兵のT2曹、常に人徳のいたすところと、すぐ諦めてしまう気の弱いW軍曹など種々雑多な考えを持った人々の中で彼はいつもじっと考える。

すると一つの声が「お前は楽天家じゃないか、くよくよ考えるな。お前の思った通りやればいいんだ。お前の考えは正しいんだ。」といって中断してしまう。しかし、静かになり、自分一人になったときなど、「お前は楽天家なのをいいことにして、ひとつも自分の悩みを深く考えようとしないじゃないか。それこそ、お前が最も嫌っている現実に妥協し苦痛から逃避している証拠ではないか。」

というもう一方の声が聞こえてくる。

しかし、誰も彼も自分の任務を果たし、どうしたら自分達の社会が進歩するか、国が立派になるか、一生懸命努力していることに違いはなかった。

春が来て雪がとけ、夏が駆け足で通り過ぎ、2年目の冬がやってきた。S小隊は泥まみれになり雪ダルマのようになって北海道の山野狭しとかけまわった。みんな元気に、真っ黒になって激しい毎日を克服していった。

そして、また夏がめぐってきた。

そのある日、連隊全部の射撃大会が行なわれ、S3尉の小隊は予想外の健斗により栄えの優勝をなしとげた。一つだけ駐屯地から離れたこの田舎の大隊から優勝が出たというので、一同大いに喜んでさっそく祝賀会が開かれ、S3尉は一躍英雄視されるにいたった。

それから一週間も経たない頃、彼は命令を受けて、約四十キロばかり南方の市にある連隊本部へ行った。そこで彼は意外な噂を聞いた。彼の部下である2曹が点数をごまかし、第一大隊の某小隊の得点より1点したであったのを、繰り上げて上位にしてしまったというのである。S3尉はもちろん信じたくはなかった。

分屯地の田舎侍が優勝したのでひがんでいるのだろうと思わすカッとなり、用をしますとさっさと帰途についた。しかし、帰りの汽車の中で心が平静になってくると、火のないところに煙は立たない。きっと何かあったんだろう。帰ったらそれとなくTに聞いてみようと思い直した。

事実は噂の通りであった。採点に関係したT2曹は、とかくこの恵まれない分屯地の士気を鼓舞するため、1点ぐらいでは実力は同じと判断し、悪いと知りつつやってしまった。そして、今になって噂がとんだくらいで優勝を返上することは、隊員の士気にも大きく影響する。何も悪い気でやったのではない。隊員全部の努力に報いるためだったというのであった。事実、S小隊の方が立射、及び最も大切な戦闘射撃において、はるかに他を引き離していたことは、誰も認めないわけにはいかなかった。

S3尉はT2曹の真剣な眼を見つめたまま黙っていた。しかし、得点は得点であった。

あくる日、彼は、中隊長と大隊長に昨日のできごとを話した。そのような噂の聞こえていないこの分屯地のことであるから、両隊長は大いに驚いた。だがS3尉の気持ちはよくわかってもらうことができ、彼が公にするまで口外しないことを約束してくれた。次にS3尉は再び連隊に足を運び、採点に立ち会った幹部、曹、及び優勝した小隊長に、ことの真意をよく伝え、T2曹の善意を汲みとってもらった。このため、かえって噂はそれきり消えてしまい、気持ちの悪い空気はなくなった。

ある晩、S3尉は全員が寝静まってから、入り口の額に入れてあった賞状をこっそり抜きとり、台の上に置かれていた優勝旗を大隊本部に運んでしまった。連隊から明日受取りにくるというのである。外はいい月であった。彼は優勝の墨痕も鮮やかな賞状と、まだ新しく重い優勝旗を、感慨深げにいつまでもいつまでも見つめて立っていた。

あくる朝、小隊は大騒ぎとなった。S3尉はわざと朝礼の時間まで皆の前に姿を現さないことにした。やがて8時、荘重な君が代ラッパと共に、本部の粗末な掲揚塔に日の丸が上がっていった。S3尉は、採点の誤りにより、優勝は我が小隊ではなかったことを述べ、僅か1点ではあるが、得点は得点であるということを諄々と説いた。そして優勝した小隊と、反目することのないよう言い含めた。そして来年の大会には、今度こそ確たる優勝の栄誉を担おうではないかと全員を激励した。

誰も彼も驚き、次にはガッカリした。黙っておけばいいのにと言うような眼差しを向ける隊員も多かった。S3尉は辛かった。T2曹はそれにも増して辛かった。中隊長も大隊長も何となく元気がないように見えた。

しかし、時が経つにつれ皆の気持も変わってきた。S小隊は毎朝短い時間を利用して照準の練習に励むことになった。これはT2曹の発案で、毎日毎日規則正しく続けられた。外出前も、演習の朝も、S小隊は一丸となって頑張った。

紙の入っていないガラスばかりの額はまだ皆を見下ろしていた。台は優勝旗のないまま、物憂げにあくびをしていた。

日ごとに高くなっていく太陽が雪の表面をザラメのように変え、少しずつ溶かしていった。今まで真っ白だった地面のあちこちから、ぐしゃぐしゃみに濡れた草がポッカリ顔を出し、道路の雪が消え、ずんずん暖かくなっていた。短い楽しい百花咲き乱れる春は、あっという間に過ぎ、夏がやってきた。

ダーン、ダーンと、山にこだまする重々しい実包の響きが、のんびりした太鼓の音のように聞こえるよく晴れた夏の日であった。

T2曹の狙った黒点は照星の上でビクともしなかった。ダーン、洩光弾は赤い尾を引いて黒点に吸い込まれていった。

第2回射撃大会は無事終了し、S小隊は、努力の甲斐あって大差で優勝した。そればかりではない。S小隊に刺激された連隊全部が昨年よりも平均点をぐんと引き上げた。

入り口の額には再び優勝の賞状が入れられ、優勝旗は台の上にずっしりと置かれた。

その秋には、長く親しんだ中隊長と隣の小隊長H3尉が転出し、それぞれ新しい上官を迎えたが、小隊も中隊も、前にも増してなごやかであった。

小隊にE1士という極めて無口な隊員がいた。両親も健在で家庭も貧しくはないのだが、この青年は笑ったことがなかった。すべてに消極的で友達もいないようだった。

S3尉はかねがね、Eのことを気にはしていたが、どうしたらよいかわからなかった。まあ、つとめて話しかけるようにしていたが、受け答えがないので話がとぎれてしまうことが多かった。全員が並んだとき、何か気にな

ると思うとEのことであった。

ある演習の昼食時であった。その日の飯盒には、煮豆と、干魚と、沢庵が2、3切れ入っていた。S3尉は甘い物はあまり好きではなかった。ふとそばを見るとE1士が一人ぽっちでうまそうに豆を食べていた。彼は本当にこの豆が好きなようであった。S3尉はEの後ろから、「E、お前これ好きか？」と聞いた。E1士はびっくりしてS3尉を見上げ、「ええ、好きです。」と、ぶっきら棒に答えた。「そうか、俺はあんまり好かないんでな。これお前食べろよ。」といってEの昼食に自分のを入れてやった。そのときE1士は初めてニコッと笑って、びっくりするほど快活な声でこういった。「ありがとうございます。それじゃ、小隊長にこの沢庵をあげます。」

S3尉はなんだか胸が熱くなって、飯がつかえそうになった。

それからE1士は、朝も笑顔でS3尉に挨拶するようになり、次第に朗らかになっていった。

S3尉は猫がとても好きである。彼は街のはずれに下宿しているが、そこに丸々太った虎みたいな猫を飼っている。彼が留守の間は下宿のオバサンが世話をしているのだが、子供もいないこの人は、とても可愛がってくれる。そのうえ、S3尉の躾がよいためか、近所にも極めて好評である。

この猫は、S3尉の部隊の近くにある小学校の門前に捨てられていた子猫であった。彼は下宿している身分でもあるし、部隊に置くわけにもいかないしと、行ったり来たりと迷ったあげく、遂に意を決して、連れてきてしまったのであった。

名前は姿の通り「トラ」というが、実際はいたっておとなしく、少なくとも活発な猫ではない。S3尉は、一月にいっぺんぐらい、魚屋から丸々とした生きのいいのを一匹買ってきて、ご馳走してやっていた。さすがのオバサンも、最初、これにはびっくりして、「Sさん、この猫は仕合わせ者ですよ。人間だってこんないい魚は食べたことありゃしないですよ。」といった。トラは何も知らずに首をふりふり、大きな銀色の胴体に食いついていった。

S3尉がここの部隊にきてから4度目の冬がやってきた。その年は例年になく暖かく、雪の量も目立って少なかった。冬の訓練も汗ばむほどであり、楽な毎日であった。

年明けて3月、S3尉の属するこの大隊は、連隊の駐屯地に移駐して一緒になり、かわって入る施設大隊に明け渡すこととなった。

遠い山々は、まだ純白の衣を着てはいたが営庭には雪のひとかけらもみえなかった。

S小隊は先発隊として一足先に出発することになり、毎日その準備に忙殺された。

S3尉には困ったことがひとつあった。それはほかならぬトラのことである。下宿のオバサンは真から可愛がってくれるからやってもよいのだが、何としても離れるのがいやであった。しかし、これから向こうへ行ってどうなるものかわからない。いっそ俺と一緒で苦労するなら、オバサンにやってしまおうかと何べん思ったかわからなかった。だが、S3尉にとってトラは隊員と一緒であった。いや員数外の隊員の一人であった。彼はどんな困難があっても連れていくことにした。どうせたいした遠い処へ行くわけでもない。何とかなる。

もうひとつの問題があった。輸送手段である。まさか、部隊と一緒にいるのに抱いていくわけにもいかないし、人にまかせるのは不安であった。ところがこの問題は割合早く解決した。

彼は同室のB3尉の衣のうが鼠にかじられ穴があいているのを見つけた。穴はそう大きくもなかったが、底の近くにあいており、彼は今、使用していないようであった。ふと名案を思いついたS3尉は、B3尉に頼んで衣のうを借りると、その日下宿にすっ飛んで帰り、オバサンからボロの籠をもらって衣のうの中にすっぽり入れ、その中にトラを入れてみた。籠のおかげで衣のうは形を整え、みかけは少しもおかしくはなかった。中でゴソゴソ動いていたトラは、鼠の食いちぎった破れ目から顔を出して「ニャーゴ」と啼いた。こうすれば汽車で持っていかれる。彼の悩みは解決した。

出発の日は良い天気であった。腹にしみるようなラッパ音と共に、日の丸が今日も上がっていった。4年間住み慣れたこの隊舎、ボロではあったが、一人一人のあたたかい愛情と友情で、しっかりと補強されているこの隊舎、それは眼にはみえない大きな土台となり、強い柱となって、次に入る部隊をしっかり保護するであろう。

S3尉らの先発隊は皆に送られて駅に向かった。T2曹がしきりに、「隊長、衣のうをお持ちしましょう。」といったが「いいよ、いいよ、軽いんだ、本当に軽いんだから。」と彼はことわった。T2曹は、小隊長は遠慮される人でもないのにおかしいなと思ったが、S3尉が担ぎもせずに下げていくので、仕方なく黙って後についていった。

駅には下宿のオバサンと、近所の子供が15、16人ばかり見送りに着ていた。この子供たちも、オバサンもこのチッポケなローカル線に乗って、S3尉のこれから行く連隊のある市に遊びに行くのを唯一の楽しみにしている人達である。

オバサンは、元気に暮らしてくださいと言ってS3尉にタバコとトラのめざし（目刺）をたくさんくれた。

ポーッと白い蒸気を吐いてガタンと汽車は動き出した。S3尉も、T2曹も、隊員も、みんな身体を乗り出して手を振った。

オバサンも子供たちも、赤い帽子の駅長さんも、みんな次第に小さくなっていった。

「オジサーン、またきてくれやー」と子供の誰かが叫んだ。座席に落ち着くとS3尉は、目刺を一匹抜いて、衣のうの穴から入れてやった。暫くするとトラは穴から首を出して、一つ大きなあくびをして、舌なめずりをした。T2曹も隊員もみんな大笑いをした。

汽車は次第に速力を増し、長く親しんだ街が、飛ぶように後ろに流れていった。